

平成24年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

教育支援室

目次

| | | |
|---------------------------------------|------------------|----|
| はじめに……教育支援室インターンシップ専門委員 | 川合 康（文学研究科教授） | 1 |
| 1 音楽関係 | | |
| 1.0 音楽関係インターンシップ概要…… | 文学研究科教授 伊東 信宏 | 2 |
| 1.1 インターンシップ生を受け入れて | | |
| … あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール支配人 | 須崎 幸司 | 3 |
| 1.2 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールインターンシップ報告 | | |
| … 文学部3回生 音楽学専修 | 高山 華奈・徳本 恭子 | 5 |
| 1.3 京都コンサートホールインターンシップ報告 | | |
| … 文学部3回生 音楽学専修 | 縣 和憲・泉屋 七瀬 | 12 |
| 2 演劇関係 | | |
| 2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）制作演習 | | |
| …… | 文学研究科教授 永田 靖 | 20 |
| 2.1 兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター）インターンシップ報告 | | |
| …… 大学院文学研究科 博士前期課程 | 加古 雅樹 | 21 |
| 2.2 兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター）インターンシップ報告 | | |
| …… 文学部3回生 演劇学専修 | 田中 友貴 | 28 |
| 3 美術関係 | | |
| 3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ…… | 文学研究科教授 藤岡 穰 | 33 |
| 3.1 大阪市立美術館インターンシップの現状 ー導入から5年を経過してー | | |
| …… 大阪市立美術館 学芸員 | 秋田 達也 | 35 |
| 3.2 大阪市立美術館インターンシップで学んだこと | | |
| …… 大学院文学研究科 博士後期課程 | 曾田めぐみ | 37 |
| 4 映画関係 | | |
| 4.0 2012年度インターンシップ概要…… | 文学研究科教授 上倉 庸敬 | 40 |
| 4.1 東映京都撮影所インターンシップ報告…… | 文学部4回生 美学専修 山本 卓 | 42 |

はじめに

本報告書は、平成 24 年度に大阪大学大学院文学研究科および文学部において行われたインターンシップを含む授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加するという形で行われる、授業とは関係のない「インターンシップ」は、近年、増加の一途をたどっていると思われます。本報告書は、授業とは別に開催されるこうした企業主導のものではなく、あくまで文学研究科・文学部の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているインターンシップの報告をとりまとめたものです。

以下に、その実習先、人数、期間を概観しておきます。

音楽関係

- いずみホール 学部生 2 人 5 日間
- あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール 学部生 2 人 5 日間
- 京都コンサートホール 学部生 2 人 5 日間

演劇関係

- 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター） 大学院生 1 人 学部生 1 人 5 日間

美術関係

- 大阪市立美術館 大学院生 1 人 10 ヶ月、1～2 週に 1 日程度

映画関係

- 東映京都撮影所 学部生 1 人 2 ヶ月

平成 24 年度は音楽・演劇・美術・映画関係のインターンシップが実現し、参加した学生にとってかけがえのない体験であったことが、本報告書から十分に読み取ることができます。現在、実習先は芸術関係の諸施設に、また指導教員や学生も特定の専門分野・専修に限られています。インターンシップに対する取り組みは、本研究科・学部の中期目標・中期計画に明記されてきた事項でもあり、今後も着実に推進していく必要があると思われます。

最後に、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、積極的に学生たちを迎えて指導して下さっている受け入れ諸機関の皆様、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

教育支援室インターンシップ専門委員 川合 康（文学研究科教授）

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

平成24年度の音楽に関係するインターンシップは、昨年に引き続きいずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、計6名の学生について実施された。これは、1学期、および2学期開講の「音楽学演習」受講生から希望者を募ったもので、6名はいずれも文学部音楽学専修の3回生である。以下の学生からの報告は、受け入れ先のご意向を勘案し、昨年と同じくザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ掲載する。

その内容については、以下の報告に詳しいので、ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。

- ◆4月「音楽学演習」の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は6名が希望。その後、研修先を決定した。
- ◆10月15～19日の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆11月12～16日の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆10月16日～20日の5日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆12月11日(火)、3つのインターンシップについて、音楽学研究室の演習において、学生6名が報告。

今回も近畿圏の大中小3つの規模、公立/私立、と様々な性格のホールにご協力いただいた。例年なるべく実施している事前研修については、時間がとれずメールでの連絡などで代行したが、ホール側のご事情も勘案しながら、このような微調整は毎年続けていくつもりである。

指定管理者制度に続いて、劇場法も成立し、音楽ホールをめぐる環境はいよいよ変化しつつある。厳しい面も多いようだが、一方で学生たちに聞くと、ライブでの音楽体験に対する関心は増しつつあるようにも思われ、やり方によっては音楽ホールというものもこれまでとは違うやり方で大きな意味を持ってくるかもしれない。毎年のインターンシップは、私自身にとってもそういうことを考えさせてくれる貴重な体験となっている。

受け入れていただいたホールの方々には、今回も大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

1.1 インターンシップ生を受け入れて

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール支配人 須崎 幸司

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは2012年度も、大阪大学の学生様をインターンシップ生としてお迎えしました。文学部音楽学専攻の高山華奈さんと徳本恭子さんのお2人。期間は11月12日（月）から16日（金）でした。

このホールは損害保険会社のCSR（企業の社会的責任）活動の一環として、芸術文化の振興と地域社会への貢献を目的として設置・運営されています。研修でも冒頭、支配人がこの件を述べました。そして、ホールスタッフが講義を担当し、私たちホールが併せ持つ二つの側面を講義と実習プログラムで学んでいただくように致しました。一つは、私たちホールが主催し開く公演、すなわち「自主企画公演」のあり方。もう一つは、私たちホール以外の主催者にホールを貸し出し行われる「貸し館公演」のあり方であります。

前者は①企画の際の狙いや考え方②企画決定後に公演を迎えるまでの営み（アーティストや彼らが所属する音楽事務所、あるいはホールの音響・照明技術者らとの様々な打ち合わせや調整・依頼・発注など多様な業務。「制作」と呼ばれます）③広報の実情、また券売・集客のための業務などの説明からなります。一方、後者は、「私たちホールが、大阪・関西の代表的な室内楽ホールである」との自負もお伝えし、ホール設置の趣旨に合致する様々な公演を適切に開催していただくための様々な業務をご紹介しました。双方に関わる業務として、券売を取り扱うチケットセンターや私たちホールの事業全体に関心を持ち支援してくださる「友の会」と呼ぶファン組織に関わる業務についてもお伝えしました。

企業の芸術文化支援施設として設置・運営されているとはいえ、ホールは市民の皆様にとっては「エンタテインメント施設」「サービス業」として立ち現れます。このため聴衆はもちろん、アーティストやその関係者の方々に向けて上質なサービスを提供することが日々求められ、customer oriented な（顧客志向の）運営が必要であることは言うまでもありません。事業展開にあたっては、設置・運営企業の運営理念をはじめ、メディアの記者や評論家の方々から事業に対し寄せられるご意見・ご批評ともども、こうした「顧客目線」の意識が絶対的に欠かせません。「内」と「外」の、多様なステイクホルダー（利害関係者）の声を意識し、日々の業務を変化させていくことが求められているのは、通常の企業と同様です。

そうした営みの総体を、限られた時間で十全にお伝えするのは、なかなか難しいことです。しかし高山さんと徳本さんのレポートを拝見し、少なくともその肝要な部分については、「音楽の現場」である私たちホールで多少なりとも感じていただけたのではないかと受け止めてお

ります。私たちホール主催の公演当日、運営に立会い、またお手伝いいただくことで、講義でお伝えした事柄を、ハートで感じていただけたことがあったことと、理解しています。

経済減衰による企業収益の悪化、大阪市の文化行政に端的に見られる芸術文化の公的な支援の見直し、IT 革命の浸透による市民生活の中での音楽（とりわけ、私たちホールが事業の軸に据えている西洋芸術音楽）の位置付けの変化など、音楽ホールを取り巻く環境には厳しいものもあります。そのような中で事業を模索する私たちの姿からお2人が、「プロとして音楽の仕事に携わる」ことの意味を考えてくださったなら、このインターンシップはおそらく、意義深いものであったということが出来るでしょう。

お2人のような若い学生様をお迎えし、個々のスタッフが私たちの業務をまとめてお伝えすることは、単に教育であることを越えて、その活動を通じ、自己の日常業務を客観的に概観し、相対化し、さらにはそれを改善する契機ともなり得ます。その意味でインターンシップは、音楽事業体と大学との産学連携をはぐくみ、深める貴重な機会です。今後も引き続き、宜しく御願いたします。

1.2 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールインターンシップ報告

【学生からの報告】

文学部 3 回生 音楽学専修 高山 華奈・徳本 恭子

【研修スケジュール】

1 日目(11 月 12 日月曜日)

- ① ホール職員紹介(全体朝礼)
- ② あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの概要
- ③ 『ブルーオーロラ演奏会』の公演概要
- ④ ホール内案内

2 日目(11 月 13 日火曜日)

- ① 自主企画事業公演・広報
- ② 全体会議(打ち合わせ)参加
- ③ チラシ挟み込み作業

3 日目(11 月 14 日水曜日)

- ① 自主企画事業・広報
- ② 防災会議・訓練参加

4 日目(11 月 15 日木曜日)

- ① チケットセンター業務について
- ② 友の会組織・運営について
- ③ 貸館事業
- ④ 貸館公演の受付・インフォメーションの作成
- ⑤ 機関誌「サロン」について

5 日目(11 月 16 日金曜日)

「公演当日の対応について」を研修テーマとして
ホール内準備、リハーサル立会い、公演本番・終演後対応の実務実習

【1 日目】

■ あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの概要

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール(以下フェニックスホール)はメセナ活動の拠点として 1995 年に設立された。管理運営は MS&AD ビジネスサポート株式会社に委託している。保険会社自体の経営状況がホールの運営にかなり影響してくる。

ホールはクラシック中心に良質な音楽を市民に向けて発信することを通して芸術文化の振興をはかり、地域社会に貢献することを目的としている。年間でほしい自主企画公演を 20 回、貸し館公演を 170 回行う。

職員数は 13 名で、自主企画公演・貸し館公演に分かれて仕事をされている。音楽に精通した方ばかりだが初めからホールに就職された方はほとんどなく、記者や事務職員など様々な経歴を持つ方がいる。それぞれの方が経験や人脈を生かして、忙しいながらもやりがいを感じながら仕事をされている印象を受けた。(徳本)

■『ブルーオーロラ演奏会』の公演概要

研修 5 日目に行われるブルーオーロラ サクソフォンカルテットの概要や当日の動きについて説明を受けた。

今回の演奏会は年 7 回のティータムコンサートシリーズの一つで、演奏だけでなくお菓子とドリンクも楽しめる。フェニックスホールの自主企画公演である。ブルーオーロラは 2010 年結成のサクソ四重奏グループで、クラシック・現代音楽・ジャズなど幅広いジャンルでの音楽活動を行っている。今演奏会のメイン曲の一つ、武満徹「一柳慧のためのブルーオーロラ」は図形楽譜を用いた作品で、扇を持ちながらのパフォーマンスを伴う。演奏一回一回でパフォーマンスが違ってくるため念入りに打ち合わせが行われた。(徳本)

■フェニックスホール内案内

フェニックスホールは入居するビル(あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー)の 2 階から 6 階に設置されている。約 300 席、残響が長めで美しく室内楽に適している。ホール正面の壁は可動式で、普段は遮光壁として使われているが、壁を上げると御堂筋の景色を眺望できる。残念ながら今回は見ることはできなかった。見学の際、三原剛の朗読リハーサルを見せていただいた。ホールが小さい分出演者との距離が近く、息遣いを肌で感じることもできる素敵なホールだと思った。

廊下の絵やオブジェもひとつひとつにこだわりがある。

一階席はフロアに段差があり、お客様が転倒されることのないよう毎回休憩中や終演時にお声かけをするそうだ。少ない職員の中からお声かけに配置することについて疑問に思っていたが、段差はかなり大きくお年寄りのお客様が多いことから、とても大事な役割であると感じた。(徳本)

【2 日目】

■自主企画公演について 1

自主企画公演ではアーティストとの連絡から広報活動、チケットの売りさばきまですべてホール側が行う。自主企画公演をどれだけの回数できるか、どんなアーティストを呼べるかということは、ホールのステイタスにつながる。近隣ホールの事業内容との兼ね合いも考えて企画

を練る。有名なアーティスト・有名な曲だけでなく、民族音楽やレクチャー企画・現代音楽など、マイナーだが人々にとって新しい価値のある公演にも力を入れている。苦労話も聞かせていただき、根気強さと人脈の広さが必要だなと思った。

自主企画公演の中でも、さらに純粋な自主公演と買物公演に分けられる。音楽系の会社が演奏会をパックにして売り出しており、それを買うのが買物公演である。

どうして行政が芸術を支えるのか、というお話もしていただき興味深かった。このお話を元に企業の行う芸術文化支援についてのいくつかの説を示していただき説明を聞いた。説得力があるなと感じたのは威信説で、芸術を保護することによって会社自体のステイタスを上げることができるからという説である。経済効果波及説は、人々を音楽事業に来させることで交通機関やホテルを使う人が増え、地域活性化のタネになるという考え方であった。市が運営するホールの多い京都市にはよく当てはまる。メセナの「見返りを求めない」というイメージががらっと変わった。(徳本)

【3日目】

■自主企画公演について2

自主企画公演の企画担当者にとって情報の発信だけでなく情報を多く受信することが重要となる。情報を多く得ることで世の中のニーズに合った企画が可能になるからだ。企画の軌道を常に修正するために記者・編集者・批評家などの第三者の介在が重要である。

最近インターネットをはじめとする新しいメディアやテクノロジーの発達、不景気で、生の音楽活動の価値が問われている。わざわざ高いお金を出してホールに行かなくともインターネットで高音質の音楽が聴ける。未来はヴァーチャル映像などでさらに本物に近いかたちで音楽を楽しめるようになるかもしれない。そんな中ホールの未来はどうなっていくのか、というお話は大変興味深かった。私は、生の良さというのはどんなに技術が発達しても変わらないと思うし、一回性は音楽の良さの一つだと思っているので、ホール自体は簡単にはなくならないと思う。しかしこの時代を生き残るためには、出演者とお話できるなどの生ならではの要素を盛り込むなど工夫が必要になると思う。フェニックスホールに関して言うと、アマチュアや学生が演奏活動の場としてホールを使えるようにすることも、ホールの品格を落としてしまうかもしれないが一つの手ではないかと思った。自主企画公演のお話に限らず、いろいろなお話をしていただきとても勉強になった。自分の仕事を客観的に長い目で見るということは難しいことだが大切なことだと思った。(徳本)

■防災会議・訓練

コンサート中に入居ビルの16階で火災が発生したという想定で避難訓練を行った。東日本震災発生時の反省をもとに防災面の改善策がだされ、危機感をもって訓練に臨むことができた。消火器体験・煙体験にも参加した。訓練後の反省会では、車いすのお客様にどう対応するかという問題があがった。フェニックスホールのお客様の年齢層はかなり高い。お年寄りや身体障

害者への対応は重要な問題である。反省会では、職員が近くのお客様に声をかけ体の不自由な人の避難を手伝ってもらうということになった。今の状態に対応できる最善策だとは思いますが、実際はお年寄りの方が車いすを持ち上げたりという危険な状態になりかねないと思う。建物の作りも複雑なので、実際の避難誘導はかなり大変になると思う。職員の方たちも不安が残った様子で、避難訓練の回数を増やすことや、防災設備の向上を望まれていた。(徳本)

【4日目】

■チケットセンター業務について

チケットセンターではお客様から直接かかる電話に対応しながら、空いている席を確認しお客様に提案をしつつお席の確保をする。インターンシップでは自分の名前を仮のお客様の名前に見立てて実際に使うパソコンを触らせていただいた。ご説明をしてくださった大前さんのお話によると、フェニックスホールのお客様（特に友の会会員）は特にコンサートのチケットをとることに慣れている方が多く、またクラシック音楽に対する造詣も深いので電話での会話から知識を教わることも多いとのことでした。一方でチケットの購入の主要な決済方法の一つが郵便局への振り込みであることは改善すべき点であるとホールの方々は認識されており、また、ネットから空席状況を見られない事などをお客様から不便だと指摘されることもあり改善すべき点として考えている。(高山)

■友の会組織・運営について

フェニックスホールには友の会という会員組織が存在する。年会費 1000 円を払い入会すると、チケットの先行予約や割引、機関誌「salon」の送付、提携店における割引などの特典を受けられる。チケットの支払いは直接振り込みであるが、友の会の年会費は自動引き落としにすることも可能なので、ホール側としては口座からの自動引き落としにして継続会員を増やす努力や、ティータムコンサートの通しチケットを来店ブースで販売する際に、友の会に入ることを同時におすすめるなどして会員数を増やす努力をしている。また、友の会とは別ではあるが、登録無料のメール会員 E-PHX のサービスもあり、公演情報やチケットの優先予約の情報が配信されているが、値引きなどの特典はない。(高山)

■貸館事業

フェニックスホールの公演には自主企画事業と貸館事業に分かれている。貸館事業は年間約 200 公演であるので、一年のうち約 3 分の 2 の間ホールは貸し出されているということになる。貸館事業では、ホールのステイタスやイメージに合致する公演に対し、ホールを貸し出す事業であり、自主企画公演のように企画にはホールは携わっていない。(高山)

■貸館公演の受付・インフォメーションの作成

貸館公演の受付はその公演を行う一年前の月はじめから受け付けが始まり、公演内容の企画

書の提出などによりホールを貸し出すに値するか（アーティストのステイタス、公演内容等々）の審査をする。この時、その公演内容をホールが良いと判断した場合は、貸館事業であっても協賛や協力と表記し広報などのお手伝いをとりわけホール側がすることもある。（高山）

■機関誌「サロン」について

「サロン」とは、フェニックスホールの友の会の会員（約 900 人前後）に年 6 回にわたり送付される機関誌である。一号を制作するのに約 2 か月強かかるとのことで、送付の日から逆算をして記事、デザイン、校正等々の締切を設定し、それに沿って仕上げられていく。かつては白黒印刷だったものを 3 年前からカラーに変更し、レイアウトもデザイナーにお願いしている。（高山）

【5 日目】

「公演当日の対応について」

公演名 : ティータイムコンサートシリーズ 92
ブルーオーロラ サクソフォン・カルテット

公演日 : 2012 年 11 月 16 日（金）
開場 13 : 30 開演 14 : 00 終演 16 : 00

出演者名 : ブルーオーロラ サクソフォン・カルテット
平野公崇（ソプラノ）
田中拓也（アルト）
西本淳（テナー）
大石将紀（バリトン）

プログラム : J・S・バッハ（平野公崇編）：平均律クラヴィーア曲集第 2 巻より 第 1 番
プレリュード&フーガ ハ長調 BWV870

J・S・バッハ（平野公崇編）：トッカータとフーガ ニ長調 BWV565

P・I・チャイコフスキー（平野公崇編）：「四季」作品 37 から
7 月「草刈り人の歌」 10 月「秋の歌」

A・K・グラズノフ：サクソフォン四重奏曲 変ロ長調作品 109 から
第三楽章 アレグロ・モデラート

<休憩>

武満徹：一柳慧のためのブルーオーロラ

B・バルトーク（平野公崇編）：「マイクロコスモス」第6巻

「ブルガリアのリズムによる6つの舞曲」から

平野公崇：ララバイ～「江戸の子守唄」による

ティータイトムコンサートということもあり、ホールの皆様は朝から手早く準備を行っていた。インターンシップ生としてコンサートのポスターの張り出しやお客様導線確保のためのポールを設置から実際にお客様の誘導・レセプションの補佐等々多くを実務経験させていただき、ゲネプロ・フロアマネージャー・ステマネの様子などを間近で見学させていただいた。

ティータイトムコンサートならではの茶菓の準備や実際のお客様の様子なども見学でき、また、チケットセンターで買われたであろうそのチケットをお持ちになる現実のお客様やプログラムをご覧になりながら開演を待つお客様を实际目の当たりにし、それまで四日間でたくさんお話していただいたホール運営の事項一つ一つがつながって公演を成立させていることを生で感じられ大変良い経験であった。（高山）

■最後に

インターンシップの5日間、お忙しい中時間を割いてたくさんのお話をさせていただきありがとうございました。仕事の説明だけでなく、人生の話も聞かせていただき大変おもしろかったです。人との縁というのは大切だと感じ、人生の機微に触れた思いがしました。5日目のコンサートではお客様と接することが想像以上に難しいということを経験できました。ご高齢の方に質問されたときは、言葉が聞き取りにくかったり質問の核を汲み取れなかったりといった困難がありました。即答することの難しさを痛感した上での職員の方の臨機応変な対応は、見ていてとても勉強になりました。

社会に出て働く方たちの姿を見てお話を聞かせていただくというのは私にとってなかなか無い貴重な機会でした。インターンシップを通して、働くこと・就職活動することに対する意識が前向きになってきたと思います。それはフェニックスホールの職員さんたちが、それぞれの得意分野や人脈を生かしていきいきと仕事をされていたからだだと思います。5日間本当にありがとうございました。（徳本）

今回のインターンシップの前まで、ホールはホテルのように不特定多数の人と一期一会のコミュニケーションしかとれない場所であるというイメージを私は持っていた。しかし、インターンシップでホールの方々のお話を聴いてそのイメージは少し間違っていたと感じた。たとえば、チケットブースでの電話対応にて、電話越しにお客様から出演アーティストの情報について逆に教えられる事があるというお話や、私たちのホールには音楽への造詣の深いお客様が本当に多く、特に友の会の方はそうであると得意げに話す社員の方々のお話を聴いてイメージが変わった。また、5日目の実習では常連と思われるお客様とお話をされる支配人の方の姿を見

ることができ、フェニックスホールがとてもアットホームでお客様と良い関係を結んでいるホールなのだと実感した。

また、海外の有名ホールがコンサートの動画をインターネットで有料で配信し始めたということが職員の方との間で話題に上がった。職員の方は、今後もっと技術が発展し家に居ながらホールの音楽と同じクオリティで音や映像を感じられるようになれば、ホールも淘汰されていくこともあるのではないかとおっしゃっていた。CD というパッケージが終わりを迎えつつあり、これからはライブ営業と物販で稼ぐ時代だなどと言われているが、生の音楽を提供する場としてのコンサートホールの方々でさえも（さらにクラシックでさえも）、技術や通信の発展によりこれからの在り方や運営が変化していくことを考えている。私はそこまで考えがいたっていなかったもので、このお話がもっとも印象的だった。（高山）

1.3 京都コンサートホールインターンシップ報告

【学生からの報告】

文学部3回生 音楽学専修 縣 和憲・泉屋 七瀬

私たちは、2012年10月16日から20日の5日間、京都コンサートホールにてインターンシップに参加させていただいた。その内容について報告する。

◆研修内容概略

期間 2012年10月16日(火)～10月20日(土)

日程 (いずれも8:30～17:15)

第一日目(10月16日)

- ・オリエンテーション
- ・施設見学・事業説明
- ・レセプション業務

第二日目(10月17日)

- ・舞台業務(大ホール公演)

第三日目(10月18日)

- ・コンサートガイド作成業務
- ・サウンドパネル録音
- ・チケットカウンター業務

第四日目(10月19日)

- ・ホームページ作成業務
- ・自主事業企画について

第五日目(10月20日)

- ・演奏会当日業務(楽屋受付、チラシ挟み込み、プレゼント受付)
- ・舞台業務(小ホール公演)

◆ホール概要

16日、インターンシップ担当の前田さんより、ホールについての説明を受け、施設を案内していただいた。

京都コンサートホールは、世界文化自由都市宣言の具体化事業ならびに平安建都1200年記念事業として平成7年に建設された。平成18年より公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が

管理運営している。京都市交響楽団をフランチャイズ・オーケストラとしている。

設計は磯崎新によるもので、風水と京都の町屋をテーマとした独特のスタイルをもっている。まず、エントランスからすぐ大ホールには行けず、壁に名演奏家たちの写真が飾られた長い螺旋のスロープを上って上階へ行く仕組みになっている。このスロープには、客人を現実空間から非現実空間に誘い、音楽的陶酔感を演出するねらいがある。実際に上ってみてこの仕組みはとても有効な作用があると実感したが、一部のお客様からは「結局駅から徒歩3分では着かない」などの声もあるそう。中央の円形の空間は風水的な設計で、十二本の円柱が配され、それぞれに十二支のモチーフが刻まれている。床の幾何学模様は一様ではなく、だまし絵のような雰囲気がある。ホール内部では、大ホール、アンサンブルホール ムラタ(小ホール)ともに壁面が木の格子状になっており、これも町屋のイメージである。大ホール(総席数 1833 席)には国内最大級のパイプオルガンが設置されており、世界初の尺八や篠笛などの伝統的な和楽器のストップを備えている。アンサンブルホール ムラタ(総席数 510 席)は六角形の形状であり、これも風水の考えによるものである。壁面が天井に向けて外側に反った形になっているのは、空間を広く、天井を高く見せるための工夫である(京都市の建造物高さ制限に対応させるため)。

◆レセプション業務

16 日の京都市立修学院中学校合唱コンクールにおいて、レセプション業務を体験した。この時期(10 月中旬)は中学校などの合唱コンクールラッシュの終盤だそう。今回はチケットがなく、自由に入退場出来る演奏会なのでもぎり等の仕事がなく大きな演奏会とは異なる態勢だったが、それでも 15 人ほどのスタッフが入口前や客席正面、各ドア前などの各ポジションにつき、空席状況や席を移動されるお客様の情報など、素早く情報を交換、共有し、一組のお客様に複数のポジションのスタッフで行き届いた対応が出来るようなシステムが構築されていた。各ポジションの連携とそれぞれの臨機応変な判断が求められる業務。今回は生徒と保護者で客席の位置が異なっていたため、とくに保護者の方々を適切な客席階と位置に誘導し、客席が混雑してくると空いている位置を案内した。色々なおお客様の質問に対応しながらも、舞台の進行状況と空席状況を常に把握しておかなければならず、予想以上に大変な業務だった。

京都コンサートホールは大ホール・小(ムラタ)ホールともに構造が複雑で、ホール入口から客席のドアまでが遠く、回り込んで行かなければならないので、行き先が分からなくなるお客様をその都度正しい方向に誘導しなければならないこと、中心となって指示を出す客席正面のスタッフからホール入口の状況を確認できないことはスタッフからはやや不都合だと感じた。また、大ホール入口のある二階には大きなトイレがなく、利用するには階段で他階に移動しなければならないというのは利用者にとってやや不便だと感じた。

◆舞台業務

17 日には「クロネコファミリーコンサート 音楽宅急便」の公演があり、それに関わる舞台業務を見学・体験させていただいた。京都コンサートホールは舞台業務を株式会社 SMS に委託

している。当初、見学は仕込みとリハーサルのみのものであったが、現場の方々のご好意により、本番の様子も舞台袖から見学させていただくことができた。またこの日、SMS ステージマネージャーの森本さんと洛南高校吹奏楽部顧問の池内先生との打ち合わせにも同席させていただいた。

打ち合わせの後、森本さんに、打ち合わせの際の心掛けやステージマネージャーの仕事についてお話を伺った。

◇打ち合わせでの心掛け

相手の時間を頂いているという意識のもと、簡潔かつ深い議論ができるように、明確なイメージを育てておいてから打ち合わせに臨む。また、クライアントの立場や知識量、付き合いの深さまでも考慮し、相手の目線に合わせた提案をする。

◇「ステージマネージャー」という仕事について

ひとつの演奏会をつくるのにはたくさんの方が関わっているので、確実な進行管理のために、限られた時間の中で何ができるのかを把握していなければいけない。また、ステージマネージャーとして大事なものは、この人になら仕事を任せられるという信頼を得ること。仕事を確実にこなしてゆくことで長期的な信頼関係を築くとともに、いつも落ち着いた態度でいることが必要である。

お話をうかがって印象に残ったのは、ステージマネージャーは公演に関わる人々それぞれの立場に立ち目線を共有しているということであった。全方面に対する想像力が活かされるということがわかった。

◇大ホール公演概要

公演名：「クロネコファミリーコンサート 音楽宅急便」

プログラム：

〈音楽物語〉デュカス／新井鷗子構成：魔法使いの弟子

〈オーケストラ演奏〉レスピーギ：交響詩「ローマの松」 ほか

指揮：飯森範親

司会・ナレーション：朝岡聡

演奏：京都市交響楽団

合唱：京都市立醒泉小学校

主催：ヤマトホールディングス

◇当日の動き

- ・開場前：舞台設営・リハーサル見学、打ち合わせ見学

- ・開演中：調光室からの見学、撤収作業
- ・終演後：撤収作業

まず、SMS 舞台担当の宮村さんにお話を伺いながら、設営業務を手伝わせていただいた。電動迫りの数値入力・設定、椅子・譜面台出し、平台・階段の設置、看板の設置等を行った。今回は主催側より吊看板の依頼があったため、製作・設置をホール側の舞台担当者が行うとのことであった。設営の際、けがや事故のないように声を掛け合って安全にじゅうぶん留意する。

舞台設営後、当日の打ち合わせを見学した。台本を見ながら進行の確認をする。照明についてはここで指示されていた。

設営では、長年の作業で蓄積されてきた現場のノウハウを身につけ自分のものにすることが基本であるようだ。効率的な仕事体系が印象的であった。また、演奏会の現場に対する想像力も要される。照明については、開演・休憩・終演と、公演の要所を締めるものであるのを改めて感じた。

本番中は、主に調光室で裏方さんの仕事を見学させていただいた。調光室では、「魔法使いの弟子」でのナレーションのタイミングや、「ローマの松」でのバンダ照明のタイミングを指示する様子などを見ることができた。「ローマの松」ではバンダのほか鳥の声など特殊な仕掛けも多いので、そのたびにお客さまが驚いたり喜んだりする光景が見られたことが心に残った。一方舞台裏では、不要になったもの（はけた譜面台・椅子、立て看板等）を次々と片付けていた。また、曲間・終演後には舞台袖で指揮者の送り出し・お出迎えをするが、このときスタッフの方々は、指揮者が集中したりリラックスしたりできるよう、よい雰囲気をつくるのを心がけているように見えた。お客さまに対してよい演奏会を提供しようとすることは、同時に出演者を気遣うことでもあると実感した。

◆チケットカウンター業務

18 日、担当の大畑さんより、チケットカウンターの業務についての説明を受け、チケットの申込書の規格を変更する作業を行った。チケットカウンターにレジを導入し、レシートによる記録管理を近日中試験的に行うとのことである。これにより金銭管理及び申込書記入の効率上がる見込み。それでも業務の大部分は手作業によるもので、作業の効率化が課題であるように思われた。窓口・電話・インターネットによる予約の情報を一元的に管理したり、チケット発行の手間を軽減させたりするようなシステムの導入が望まれる。

◆自主事業企画

19 日、事業課の福島さんに京都コンサートホールの自主事業について教わった。京都コンサートホールでは、外部からの持ち込み事業(貸し館事業)以外に、京都の芸術文化の振興・発展を目的とし、多様な自主事業を展開している。

◇京都コンサートホールにおける事業・公演数の変遷

| 年度 | 事業数 | 公演数 | 講座数 |
|--------------|-------|-------|------|
| 平成 20 年度 | 28 事業 | 42 公演 | 1 講座 |
| 平成 21 年度 | 29 事業 | 38 公演 | 1 講座 |
| 平成 22 年度 | 32 事業 | 50 公演 | 1 講座 |
| 平成 23 年度 | 32 事業 | 49 公演 | 1 講座 |
| 平成 24 年度(予定) | 36 事業 | 53 公演 | 6 講座 |

◇財団の自主事業分類

「鑑賞型」… 海外オーケストラや著名なアーティストの公演

(24 年度)

- ・バイエルン放送交響楽団 オールベートーヴェン
- ・「ケージ×ビートルズ」高橋アキ ピアノ・リサイタル ほか 全 21 公演

「普及型」… 入門編や廉価な演奏会

(24 年度)

- ・オムロン パイプオルガン コンサートシリーズ
- ・バロック宮廷の華～ダンスと音楽の饗宴～ ほか 全 30 公演

「参加型」… 市民自ら参加し創造活動を行うもの

(24 年度)

- ・京都市ジュニアオーケストラコンサート
- ・音楽でつながる♪リレーコンサート 全 2 公演

鑑賞型の事業のうち、海外の著名オーケストラを招致する際は出演・公演料に莫大な金額がかかり、黒字は見込めないそう。それでもチケットの価格を抑え、赤字を覚悟で上質な演奏会事業を打ち出そうという京都コンサートホールの姿勢は評価に値すると思われる。

また、国際的に高水準の音楽の鑑賞機会の提供だけでなく、クラシック愛好家の層以外にも発信する普及型の演奏会事業も数多く行っている。そのほか、参加型の京都市ジュニアオーケストラや、青少年のための音楽鑑賞教室なども積極的に開いて青少年育成につとめ、音楽家育成の支援のため京都市をはじめとする関西の音楽大学などと連携した演奏会などの事業も行っている。このように、当ホールではさまざまに意義のある目的をもった自主事業を展開し、京都に文化発信を行っている。

◇市民の文化芸術へのアクセス拡充手法

「アウトリーチ」…文化芸術にふれる機会の少ない市民に対し、こちらから出向いて働きかけることにより機会の補完を図るもの。

(24年度)

- ・ブラスジャンクション

呉竹文化センターで、音大生を対象に金管アンサンブルの楽器クリニックを開催。修学院第二小学校で、小学生とゴマラン・ブラスが共演。

「参加型ワークショップ」…参加者が自ら文化芸術に親しむとともに、コミュニケーションを通じて他者との相互理解を促進するもの。

(24年度)

- ・バロック宮廷の華 ～ダンスと音楽の饗宴～

ホワイエでバロックダンスのステップを実際に体験。

「解説レクチャー」…演奏に解説を織り交ぜることにより、わかりやすさ、親しみやすさを追求し、文化芸術への窓口とするもの。

(24年度)

- ・夏休み特別企画 パイプオルガンもの知り博士

◇指定管理者制度と新法の相反性

- ・指定管理者制度

地方自治法の改正により 2003 年 9 月施行。公営組織の法人化、民営化の一環。地方公共団体やその外郭団体が管理、運営していた公共施設を、株式会社などの営利企業、財団法人、NPO などに包括的に代行させるもの。

- ・劇場、音楽堂等の活性化に関する法律(平成 24 年法律第四十九号)

平成 24 年 6 月 27 日公布。文化芸術振興基本法(平成 13 年公布)に則り、劇場、音楽施設等の活性化、日本の実演芸術の振興と水準の向上を図る。「劇場、音楽堂等を設置し、又は運営する者は、劇場、音楽堂等の事業を、それぞれの実情を踏まえつつ、自主的かつ主体的に行うことを通じて、実演芸術の水準の向上等に積極的な役割を果たすよう努めるものとする」(第四条)

指定管理者制度による運営の効率化、経費削減の流れと、新法制定によるさらなる事業活性化の流れは相反するものである。また、ホール業界はバブル崩壊以降 20 年間深刻な集客状況が続いており、昨年の東日本大震災でさらに拍車がかかることとなったそう。これらのような状況はホールの事業課にとって厳しいものだと思われる。そのような中でも、平成 24 年度は事業数、公演数、講座数共にここ数年で最高の充実度であり、当ホールの「京都の音楽芸術の殿堂」としての気概が感じられる。

◆演奏会当日業務

20 日にはアンサンブルホールムラタ(小ホール)で「音楽でつながる♪リレーコンサート」公演があり、それに関わる当日業務を体験させていただいた。なお、この「リレーコンサート」は、一般の公募による演奏者が出演するものである。

◇小ホール公演概要

公 演 名：「音楽でつながる♪リレーコンサート」

出演団体：大野博子・西川 舞 オーボエ&ピアノ

中野大輔・谷川尚弘 ピアノ連弾

野呂直輝・明石麻裕 コンテンポラリージャズ

あふみヴォーカルアンサンブル 無伴奏混声合唱

池田妃呂・高橋一寿 箏・尺八二重奏（邦楽）

ボニー・ブルー マンドリンとギターデュオ

Flautiste Giovani フルート三重奏

ブラスバンド・コリーズ ブラスバンド（プリティッシュバンド）

司 会：上船美智子

主 催：京都市、京都コンサートホール（公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団）

◇当日の動き

- ・開場前：楽屋受付、チラシ挟み込み
- ・開場後～本番中：プレゼント受付、舞台転換

当日は10時からリハーサルが組まれており、楽屋受付は9時から始まった。受付には福川さんに一緒についていただいた。受付では、入館者の名前の確認、楽屋の案内等をした。ここで福川さんからは、どの時間帯にどなたが来られるか見当をつけて対応するとよいとご指摘をいただいた。入館者に関しては当日の変更も発生したが、このような場合に、どの範囲の関係者まで伝えるべきか把握しておくことが必要であると感じた。

楽屋受付の合間に、プログラム400部へのチラシ挟み込みを行った。職員の方など10名ほどが参加した。チラシの重複や脱落がないように注意しつつすばやく動かなければならないので、地味でありながら神経をつかう作業だと感じた。

開場後は、小ホールの4階エスカレータ前にてプレゼント受付を行った。終演時間近くまで1時間半ほどついた。プレゼントは、お預かりするごとに控室へ運んだ。待機時間が長かったので、集中力が要された。また、クロークと勘違いされることや、お手洗いの場所をきかれることもあった。自分の持ち場はあるものの、ホール内に職員として立つときには、ホール全体のことを把握する必要がある。

終演近く、舞台転換に参加させていただいた。プログラム最後のブラスバンドの演奏前に、舞台上に張ったテープを目印に、譜面台と椅子を置いた。舞台上で足音を立てたり、走ったり、目印を思いっきり探しながら歩いたりするのは、見栄えに欠けるので慎まねばならない。転換中は照明が暗くされ、足元の目印が思いのほか見えづらい。また、薄暗い中であるとはいえ、曲間に舞台上に出るのは個人的に緊張するものであった。

◆その他の業務

担当の薩摩さんに指導いただきコンサートガイド作成とサウンドパネル録音を体験した。

・コンサートガイド作成業務

次号のコンサートガイド原稿の印刷版の誤字脱字や配色、添付写真などのミスを校正。印刷業者との原稿往復の間に必ずミスが生じるので、人の目で一つ一つ丹念に確認する。

効率良く出来ないで、骨の折れる作業。

・サウンドパネル録音

エントランスの演奏会情報コーナーのサウンドパネルの音声ガイドを収録。ポスターやチラシを一目見ただけでは分からない、それぞれの演奏会のみどころを声で解説。

◆所感

いままでホールについては、音楽を聴きに行くか自分が舞台に立つかという単純な目線しか考えたことがなかった。しかし、今回のインターンシップをとおしてそのような認識が改められた。演奏会をつくる側としての視点を得ることができ、ひとつの公演が多くの人に支えられ、多様な側面をもっていることを実感として知ることができた。音楽と関わるかたちには、聴取する／演奏するという以外にもさまざまに存在することがわかった。人と音楽の関係を考える上で、音楽と社会をつなぐ場であるホールのあり方をかえりみるのが重要になると思った。また、情報化社会のなかで機械等による効率化がすすめられるように、時代とともにホールのあり方も少しずつ変化してゆくことが感じられた。そのような中で、今回の研修では、今現在のホールの姿のひとつとして京都コンサートホールの運営の様子を間近で目にする貴重な機会になったと思う。(泉屋)

一聴衆、一演奏者として「音楽が生まれる場所」と親しんでいた音楽ホールであったが、上質な音楽をお客様にお届けするというだけでなく、人や地域との関わりを重んじ、音楽の裾野を広げる活動なども積極的に行いながら総合的に文化発信していく公営ホールとしての役割を認識するとともに、その中で働く方々のそれぞれの業務への使命感に触れることができたことは自分にとって有意義だった。お客様と客席をつなぐ仕事、演奏家と舞台をつなぐ仕事、創造と機会をつなぐ仕事、町と文化をつなぐ仕事。それぞれの力が結集する先で、音楽ホールが芸術と社会の接点となる、そのことを今回の就労体験では様々な現場の実際を通して多角的な観点から捉えることができた。自分の今後の音楽との関わり方を改めて見つめ直す機会ともなった。(縣)

2 演劇関係

2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）制作演習

文学研究科教授 永田 靖

1 目的

「劇場制作演習」では、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②（事前に学習しておいた）作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか。③稽古最終日（ゲネプロ）と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受け取っていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことを目的としている。

2 授業の進め方

事前にオリエンテーションを行う。オリエンテーションでは、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時にインターンシップについての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。

実際に5日間の研修を受ける。研修の最終日（公演初日）には、演劇学演習受講者（専修学生全員）が観劇する。普段、教室で同じ立場にいる学生たちが、初日には、それぞれ制作者（受付、チケットもぎり、場内案内者など）と観客という異なる立場に立つことで、演劇公演という「出来事性」（ヴィルマー・サウター）についてその一回性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、授業「演劇学演習」において、インターンでの経験について、劇場の概要、作品の特徴、劇団の方向性などについて報告し、ディスカッションを行う。制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、相互に議論し、上演作品の芸術的特徴が、立場の違いによっていかに異なったものとしてあるのかを理解する。

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者（学生）は観劇レポートを執筆する。授業担当者（永田）はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

2.1 兵庫県立青少年創造劇場(ピッコロシアター) インターンシップ報告

【学生からの報告】

大学院文学研究科 博士前期課程 加古 雅樹

【はじめに】

平成24年10月2日から6日までの5日間、兵庫県立青少年創造劇場(ピッコロシアター、以下ピッコロシアターとする)において、インターンシップに参加させて頂いた。

まずは、時系列に沿って今回のインターン概要を記す。

【事前学習：10月1日(月)】

永田教授による、今回のインターンシップに関する事前オリエンテーション。

【インターン1日目：10月2日(火)】

| | |
|--------------|--|
| 館長挨拶 | ピッコロシアターの大鳥館長への挨拶。今年4月に赴任してきたという大鳥館長から、「色々と吸収して帰ってほしい」という言葉を受ける。 |
| ピッコロシアター概要説明 | 業務部部長の井上氏から、ピッコロシアターの成立背景・構成についてのお話を受ける。ピッコロシアターが、当時乱立されていた「無目的ホール」と揶揄されるような大きなハコとしての劇場ではなく、一つの作品を作り上げることや、使う側の立場を考慮して作られているという点などを教えて頂いた。 |
| バックステージ見学 | 劇場の安積専門員の引率の下、『虎と月』が行われる大ホールの舞台裏見学。仕込み見学も、という話であったが、この時間までに既に舞台は建て終わられており、見学時は照明のシュート作業中であった。舞台下の奈落・資金援助により昨年導入された最新の音響機材・照明卓など、普段目にすることのない機材・舞台装置を間近に見れ、気持ちが高ぶるとともに、また、説明はうけていたものの、これらの設備を抱える劇場の舞台裏の空間にかなりの余裕がある点が驚きであった。 |
| ピッコロ演劇学校説明 | 尾西氏の方から、演劇学校の沿革、運営についての説明。昭和58年に設立された本科、翌59年に設立された研究科(本科卒業生あるいは演劇活動の実績を有する人が対象)により構成されている。指導には、ピッコロ劇団員があたる。 |

| | |
|--------------|---|
| ピッコロ演劇学校授業見学 | 本科・研究科の授業の様子を見学。それぞれ発表会が近いらしく、本番に向けた実践練習が中心。本科では発表グループ毎の打ち合わせ・自主練習が中心。研究科では、劇団員の島守講師の指導の下、ダンスシーンの振付と位置取りを入念に確認。生徒の幅広い年齢層と、和やかな雰囲気稽古場が印象的であった。 |
|--------------|---|

インターン1日目は、主にピッコロシアターという施設についての理解を深めるための説明を多く受けた。業務部副課長の尾西氏の方から、様々なセクションの方々から、業務内容などの説明をして頂く、という今回のインターンシップのコンセプトと今後の予定を最初に聞いていたので、ある程度構えて臨むことができた。説明を通して、ピッコロシアターが機能性を考えて作られた劇場であるという点を改めて知る事が出来た。また、人材育成・地域貢献の一環としての演劇学校の授業では、想像以上に和やかな雰囲気に少し驚いた。見学をしていて、生徒達の、楽しみながらかつ真剣に指導を受ける様子や、講師の方々の、楽しく演劇を教えよう、という気概が感じ取れた。

【インターン2日目：10月3日(水)】

| | |
|------------|--|
| ピッコロ劇団概要説明 | ピッコロ劇団制作部の田窪氏によるお話。 ピッコロ劇団は公立劇団であり、劇団員は公演への出演を始め、ワークショップの講師をしたり、地域への還元を理念に活動を行っているとのことのお話を伺う。 |
| 業務連絡会議見学 | 各セクションの代表者による現状報告。セクション毎に分担された作業について、職員全員が共有する機会となっている。 |
| ピッコロ技術学校説明 | 技術学校担当の中西氏の方から、技術学校の沿革、構成についての説明を受ける。コースは、舞台美術・音響・照明の3コースがあり、約20名の生徒が在籍。一年間をかけて舞台技術のノウハウを学ぶ。一度卒業した方でも、コースを変えて再入学する方や、また、同じコースでもう一年受ける方もいると聞く。こちらも、演劇学校と同じく様々な職業・年代の方々が通っているということで、多様なニーズに答えるコース運営の柔軟さを知る事が出来た。 |
| ピッコロ技術学校見学 | 技術学校の各コース(美術・音響・照明)を一通り見学。美術コースでは研究科との合同発表会に向けた舞台案の提示を、音響コースでは編集作業についての実践を、照明コースでは |

| | |
|--|---|
| | 灯体をバトンに吊り、その特性を実際に動かしながら学んでいた。中盤以降は照明コースにて見学。2時間という講義時間が影響しているのか、やや駆け足気味であったが、内容は充実した濃いものであると感じた。 |
|--|---|

インターン2日目は、歩道をはさみピッコロシアターの向かいにある劇団部にて、劇団制作部の田窪氏によるお話。特に印象的だったのが、東日本大震災関連の被災地支援に関する取り組みの例についてのお話であった。真の復興のためには、現地のアーティストの支援が大切という指摘には、はっとさせられた。後述するが、実際にその理念に基づく取り組みが行われている点が素晴らしいと感じた。

その後、業務連絡会議の見学。各セクションの代表者が、意見交換を兼ねた現状報告を行う中で、印象に残ったのは、広報担当の方が翌月に迫った公演のPRポイントを伝えていた点である。劇場で行われる公演の見どころや基礎知識を職員全員で共有することは、宣伝活動の促進にも繋がるし、何より劇場と劇団の関係者が一体になって公演事業を後押ししようという姿勢が垣間見れた気がした。

【インターン3日目：10月4日(木)】

| | |
|--------------|--|
| 劇団制作業務説明 | ピッコロ劇団制作部の貴田氏による説明。一般劇団との制作業務比較を中心に、その違いと公共劇団ならではの側面について、そして最終的には公共劇団の求める「公共性」像とは何かという話題までを伺った。 |
| 広報業務説明 | 広報に関する概要について、広報副部長の古川氏からの説明を受ける。地域の人々に対するアプローチの方法・実際に行っている宣伝活動例を交えて、広報の役割や業務内容を分りやすく説明して頂いた。 |
| 事業企画・劇場制作説明 | 劇場制作の田房氏に説明を受ける。民間の劇場と公共の劇場の違いから始まり、共催事業や貸館など、劇場制作が行う業務についてお話を伺った。 |
| ピッコロ演劇学校授業見学 | 1日目に引き続き演劇学校の授業見学。今回は研究科のみを見学。入念なアップの後は、シーン練習が中心。初めて立ち稽古を行うシーンであつたらしく、実際に役者を舞台に立たせて、位置取りを確認しつつ、細かく切りながら通していく。実際に講師が演技を見せるなど和やかに進行。出番のない役者も共に舞台を見学する。 |

インターン3日目は、主に劇団・劇場の制作担当の方々から説明を受け、制作業務の実情について知識を深めることができた。「地域の人々にいかに届けるか」ということを主眼に置いた広報・宣伝活動は、様々な方面からのアプローチが試みられていた。特に、今回の我々のような多くの研修生の受け入れや、学生・会社役員・教職員といった多様な人々に対するワークショップの実施などを積極的に行うことによって、今まで演劇にあまり興味を持っていなかった多くの人々に、劇場に足を運んで頂く契機となれば、という話が印象的であった。また、阪急沿線でフリーペーパーを配布したり、プレスシートを作り地元紙に売り込んだりと、地域に根差した地道な努力を行っているという話も伺った。

田房氏には、商業重視の民間にはない公立の責務として、アウトリーチ・ワークショップといった発想に見られるような、長いスパンでの人材育成(演者・観客含む)、つまり、「種をまいていく」ことや、それによって県民に何を還元できるか、といった事を考えていくことが肝要であるというお話を伺った。

1日目、2日目に伺った話の中にも出てきた「地域の人々との繋がり」という点は、公共劇場としての責務の一つであるかもしれないが、想像以上に多様かつ地道なアプローチを行っている点に改めて驚かされた。

【インターン4日目：10月5日(金)】

| | |
|---------------------|---|
| 制作業務補助 (チラシ挟み込み) | 『虎と月』にて配布する、ピッコロシアター関連、あるいは他劇団のチラシの折り込み作業を行う。約 1200 部。制作担当者主導で行われる。今回は、比較的人員に余裕があったようで、予定されていた時間より早く終わったようだ。 |
| 演劇の問題点 | 高井氏から、日本の劇場や俳優が抱える問題点についての指摘。ロイヤル・アカデミーを初めとする海外の劇場や、日本の劇場でスタッフとして携わってこられた経験を織り交ぜながらの話を伺う。特に印象的だったのが、俳優の資質に関する話題である。他の芸術と違い、養成機関が確立していないが故に誰もが「俳優」になれるということは、やはり質の低下を招く要因の一つで、俳優養成のためのバックアップ・システムの確立が大きな問題であると感じた。 |
| 『虎と月』ゲネプロ見学 | 大ホールにて『虎と月』のゲネプロ(リハーサル)を見学。劇場・劇団関係者が客席で見守る。尾西氏の話によると、ゲネプロ中のトラブル、中断もざらにあるということであったが、今回は中断なくスムーズに終了した。 ゲネプロ自体は、音や照明のずれが多くあったり、役者の立ち位置のずれや台詞のテンポなど、オペ側も役者側も、本番に向けて、まだ探り探りやっているという印象を受けた。 |

インターン4日目のこの日は、本番の前日ということもあり、研修内容もそれを反映したものとなった。チラシの挟み込み作業は学生劇団で経験があったものの、実際に制作研修の一環として行うとなると、ひどく緊張した。

そして、ゲネプロ見学で初めて本公演『虎と月』の全貌を知ることとなった。音響・照明のタイミングに違和感があり、役者を含め本番に向けた調整、という意味合いが強く出たものであったように感じた。

【インターン5日目：10月6日(土)】

| | |
|--------|---|
| 初日開演準備 | 受付設営を中心に行う。公演パンフレットの後挟み作業や、『虎と月』の原作本販売コーナーの設営、ポップ作り等を担当させて頂いた。チケット関連は制作スタッフの方々が慣れた手つきで行っていた。 |
| 本番 | 会場入り口にて、パンフレット配布を中心に行う。劇場内部、入り口にそれぞれスタッフが割り振られて、お客様を迎える。高校や大学からの来場が集中していたこともあり、比較的若年層が多く見受けられた。客入りは、後ろ4列ほどと両サイドは幾分か余裕のある状態であった。開演直前には御厚意によって会場に入れて頂き、本番を観劇させていただいた。終演後、お客様のお見送りを行った後、客席の落し物チェックと翌日の公演に備えた軽い準備をして会場を後にした。これをもって、5日間のインターンシップが終了した。 |

インターン最終日である6日は、第44回公演『虎と月』の初日であった。

本番ということで、受付設営から舞台本番、終了までの一連の制作業務を見学・体験することができた。的確な指示を出し、手際良く仕事をこなすスタッフの方々の様子を間近で見ることができたのは収穫であったと思う。

また、『虎と月』本番も観劇させて頂いた。ゲネプロと比較すると、音響照明のタイミングや、観客の笑いの反応によって役者の演技の硬さが和らいでいた点などに変化が見られ、それによってゲネプロより作品が好転していたように感じた。改めて、2つとして同じ舞台はないという、演劇の持つ一回性を肌で感じる事ができた。

【インターンを終えて】

上述した通り、今回の研修では各セクションの担当者からのお話を聞く機会が多かった。お話により得た知識を基に、全てを網羅することはできないが、特に印象に残った「公立劇場・公共劇団」をめぐる事柄について提言も織り交ぜながらまとめて記述する。

「公共劇場・公共劇団」として求められる役割

○地域に根差した活動

色々な方々の話に共通して出てきた話題が、「公共劇場としてどうあるべきか」という問題である。公共劇団を抱える公共劇場は、チケット収入と助成金のみで運営される一般の劇場・劇団とは違い、県民の税金による収入も加えられるため、いかに地域の方々に還元するかつまり、地域との繋がりを重要視することが責務となる。そのために、稽古場の提供などの貸館事業・ワークショップの実施であったり、演劇学校・技術学校の運営に見られる人材育成であったり、地域の人々に実演芸術に触れる機会や、指導の場を提供するなどの活動を行っている。また、一般劇団では経済的に困難な活動も率先して行っている(距離的に離れた小学校での公演)。

○被災地支援の取り組み

被災地を回り、寸劇を行った阪神淡路大震災の経験を生かし、昨年東日本大震災においても「災害時において、文化人としてなにができるか」ということを念頭に、様々な活動を行っている。具体例としては、2011年7月、震災後に仙台に赴き、状況調査を兼ねたワークショップを実施したり、同年9月、仙台で活動する演劇集団 ARC>T の公演を、ピッコロシアターで支援し、無償で会場提供したりなどである。今年2012年には、ピッコロ劇団員が仙台に一ヶ月滞在し、地元の俳優と共に作品を制作して、仙台・兵庫(ピッコロシアター)両方で上演している。被災地にコンテンツを持ち込むのではなく、現地のアーティストの活動を如何に支援していくか、これもまた、公共劇場・劇団としての、地域への還元のあり方であると言える。

「公共劇場・公共劇団」としての問題点

○「多様な作品上演」のジレンマ

ピッコロシアターの本公演では、地域性を取り入れた作品を多く上演している。2011年の6月には、尼崎ゆかりの劇作家角ひろみ氏の作品を、同じく尼崎在住の深津篤史氏が演出した『蛍の光』や、今年6月には、尼崎ゆかりの近松門左衛門の作品『博多小女郎波枕』を取り上げるなど、あまり演劇に興味を持たない地域の人々や、ピッコロシアターに観劇に来ない層の興味を取りこむことを試みている。しかし、地域の多様なニーズに答えなければならないため、バラエティに富んだ作品を上演できるのは強みでもある一方で、ピッコロシアターとしての作品の方向性が一つに定まらないという問題点もある。劇場・劇団としてのカラーや独自性の追求もまた必要な部分もあるのではないだろうか。集客にも大いに影響してくるこの問題の折り合いをどこで付けるか、という点は今後の大きな課題であるように感じられた。

○地域性をどうとらえるか

また、地域性という言葉の曖昧さも問題の一つであると考えます。どこからどこまでがピッコロシアターの想定する地域なのかという点が少し疑問として残った。個人的には、ピッコロシアター周辺は工業地帯としてのイメージが強く、成立背景はともかくとして、劇場のみが孤立

してしまっているような印象を受ける。例えば、神戸～尼崎地区に点在する小劇場を集積したり、博物館や美術館などの文化施設を移転するなど、尼崎一帯で芸術エリアと呼べる領域を形成できれば、西宮市の芸術文化センターと合わせて、より一層地域が活性化し、お互いに作品の質という点で競い合い、今以上に親しまれるのではないかと感じた。

【おわりに】

5日間のインターンを通して、公共劇場の運営、業務、活動、実践など、様々な角度から学ぶことができた。私自身、学生劇団で制作スタッフを経験していたこともあり、公立劇団と民間(一般)制作との運営の違いや、その業務の実態について学べたことは非常に大きかったと思う。また、インターン前は漠然としたイメージでしかなかった「公共劇場」についての認識を深めることができたように思う。

そして、改めて感じることは、兵庫県の文化政策の充実度である。大阪府の惨状と比較すると、尚更浮き彫りになっていく。ピッコロシアターもその一翼を担っているという自覚を、様々な職員の方々の話や働きぶりから感じられた。同時に、時折漏れる運営に関するネガティブな話や問題提起は、職員の方々が、公共劇場というもののあり方について真剣に考え、地域に根差した劇場であろうとするために真剣に取り組んでいる姿勢の表れであるとも感じた。

その一方で、演劇の中心は依然東京に集中しているという感が強い。「地域に根差した公共劇場」として、他地域のモデルケースにもされるピッコロシアターの担う役割は今後ますます大きくなると思われる。今回のインターンシップは、そうした試みについてのお話と、実践とを交えながら、公共劇団と地域住民との関係のあり方について考える有意義な機会であった。このような機会を提供して頂いたピッコロシアター並びに大阪大学に感謝して、今後の学習に役立てたい。以上をもって報告とかえさせて頂くことにする。

2.2 兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター） インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 田中 友貴

○概要

平成 24 年度 10 月 2 日から 6 日にかけて兵庫県立尼崎青少年創造劇場のインターンに参加させていただきました。「虎と月」の仕込みから本番を見学し、手伝わさせていただくことで舞台制作の裏側を学びました。以下は一日毎に報告していきます。

10 月 2 日

- ・館長挨拶
- ・劇場の概要について
- ・バックステージの見学
- ・演劇学校見学

まずは劇場の館長の大鳥さんにご挨拶させていただきました。その後、部長の井上さんからピッコロ劇場の概要について説明していただきました。

お話の内容はピッコロ劇場の特徴と劇場誕生の経緯についてでした。特徴としては 400 席を超えない大ホールや練習に使用できる中ホールなどが挙げられると思われます。これらは市民にとっての使いやすさを重視して設計されています。また、劇場が建設された当時は多目的ホールが主流であり、演劇に特化した施設は目新しいものだったようです。

またピッコロ劇団、演劇学校や舞台技術学校についてもお話していただきました。これらの背景には演劇を含めた文化的活動の中心が東京へ一極集中していることなどが考えられます。地域で育てて、地域で活躍してほしいという思いが職員さんのお話から感じられました。

次に「虎と月」の仕込みの様子を見学させていただきました。ちょうど見学に行ったときシユート作業中(照明機器の点検)だったので、場内は暗くてよく見えませんでした。しかし、普段の生活でこのような場を見ることができないので非常に楽しく見学させていただきました。またお芝居にはたくさんの人が関わっていると改めて認識できたように思います。観客の目の前に現れるのは役者だけですが、その後ろには多くの人が存在していて初めて劇は成立するのだとしみじみとした気持ちにさせられました。

その後、演劇学校を見学させていただきました。演劇学校・技術学校については後の日にも見学させていただきましたが、本当に様々な人がいると思います。年齢層も今までの経歴も様々で、そのような環境で協力してお芝居を作ることが多少羨ましく感じました。私の生活の中でこれほど様々な人がいる環境に接することはまずないので、不思議な感じもしました。ただ、女性が多い印象を受けましたが、実際多かったです。演劇学校で男女比のバランスが取れていないと、難しい面も多々あるのではないかと思われました。そして、発表日までに 1 か月ほど

という忙しい中で見学させていただき誠にありがたく思います。

10月3日

- ・劇団概要について
- ・消防訓練
- ・舞台技術学校の見学

2日目は劇団部の田窪さんからピッコロ劇団についてのお話を伺いました。ピッコロ劇団は劇場と同じく県立のものです。この「公立」という存在について話してくださいました。「小さな政府」が重視される中で、民間の劇団が数多く存在する中でどのような意義があるのか、また果たして公立劇団は必要なのかという問題に直面しているように感じました。第二・第三のピッコロ劇団、劇場のようなものはまだ出てきていません。だから、まだこの問題について模索中なのだろうと感じます。

ただ、私は田窪さんのお話の中で触れられた阪神淡路大震災後のピッコロ劇団の対応が印象に残りました。尼崎は阪神淡路大震災の被災地です。震災後すぐに劇団員の方々はじめ職員の人々は避難所の子供たちに向けたワークショップを行ったそうです。この行動はやはり「演劇を通じて地域に還元する」という精神に基づくものであるように思います。当然、民間の劇団であっても演劇を通じて地域とつながることは可能です。しかし、そのことは民間の劇団において絶対的なことなのでしょう。税金によって成り立っている公立という存在であるがゆえに義務があるのではないのでしょうか。義務を忘れるわけにはいきません、こういったある種の制約があるからこそ、上手く機能するといった面もあるように考えられました。そして阪神淡路大震災の経験は、東日本大震災発生後でもいかされたそうです。ピッコロ劇団の方々は仙台に行き、そこでワークショップを行ったそうです。この時、ただピッコロ劇団が演劇活動を行うだけではなく仙台を中心に活動する団体(例、ARC-T)の参考になるような活動を心掛けたそうです。いわゆるたたき台として活動されました。このようなお話から公立劇団は自身の属する地域と同じく、他の地域の発展にも目を向ける必要があるように思われました。そしてこのような活動はその時だけではなく、できるだけ長いスパンで考えていかなければならないように思います。

公立と民間は劇場や劇団だけに限らず今の日本で模索中の問題だと思われれます。例えば大抵の場合、公立の方が民間よりも安価に提供できます。そのことによって公立のものが民間の発展を阻害しているのではないかという問題です。また、公立の劇団は地域性、社会性を基礎に活動していると考えられるのが一般的です。では地域性や社会性という言葉は詳しく定義できるものなのでしょうか。どこか曖昧さを含んでいるように思われれます。このように様々な問題があるかもしれませんが、同時に公立劇団であるからこそ可能な面もあるように思われれました。

10月4日

- ・劇団部の制作の方のお話
- ・劇場の制作の方のお話
- ・広報の方のお話

3日目は制作や広報といった企画・運営に関わる方々のお話を伺いました。まずは制作や広報の業務がどのようなものかを具体的に知ることができてよかったです。演劇に関わるお仕事についてぼんやりとしたイメージしかなかったので、大変参考になりました。そして、制作も広報も表には出てきませんが劇場・劇団の経営を支える非常に重要なものと理解できました。

まずは制作についてですが大まかに言えば「買う」と「売る」という2種類の仕事があるようです。他の所から芝居を買い、自分の劇団のものを売り込むということなので当然できるだけ高く売って、安く買うことが望ましいです。その他にも制作には芝居を創り上げていく過程においても様々な仕事が存在しているそうです。

次に広報についてですが、いかに自分たちの活動を知ってもらいそして劇場に足を運んでもらうかを考える仕事です。そのためには市民が何を求めているかを知る必要があります、常に情報に敏感でなければならない仕事だと感じました。

このような仕事に携わる方々のお話を聞いて、演劇全体を考えているような印象を受けました。演劇自体が他の映画などのメディアと比べて人が入らないという問題に直面しています。演劇を見に来る人は演劇に興味がある人です。だから演劇に興味がない人は劇場に来ることもほとんどありません。では、興味がない人に劇場に来てもらうにはどのようにすればいいのでしょうか。興味がある人だけ来ればいいということではなく、いかにあらゆる人に舞台芸術を拡げるかという点を常に考えているように思われました。

また2日目の田窪さんの話と同じく公立と民間ということになりますが、公立であるから仕事に集中できるという利点と独自のカラーを持ちにくいという欠点があるように思われました。そもそも民間団体では制作・広報などの担当者がいないこともよくあるそうです。その点、ピッコロ劇団のように担当が分かれていることで専念しやすいかもしれないということでした。一方で固定された演出家の不在により、上演作品に劇団らしさを持たせることが難しいとのことでした。

やはり劇場に足を運んでもらうためには様々なことを考えなければならないと実感しました。それに、商業的に成功すればいいというだけではありません。良い作品を作り、多くの人に見てもらおうという一見単純なことですが、実際には非常に難しいものだと改めて感じました。

10月5日

- ・チラシ挟み込みの補助
- ・劇場の歴史について
- ・ゲネプロの見学

4日目は本番当日に向けて、チラシの挟み込み作業をさせていただきました。挟み込み自体初めてだったので、大変な作業だと思いました。何気なく手に取っている劇場のパンフレットも地道な作業を経ていると考え、もっとじっくりと眺めようという気になりました。挟み込み作業には他劇団の方やピッコロ劇場・劇団の職員の方々がいらっしゃいました。挟み込み作業以外にも仕事はあって忙しい中でも参加していらっしゃるように思われます。また、私は挟み込みのチラシが本番当日にも追加されることに驚きました。芝居を作ることは本当にぎりぎりまで続いていくのだと感じました。

挟み込み作業の終了後、劇場の歴史について伺いました。ピッコロが今までに行ってきたことについてです。ここでも震災後の被災地での活動について伺うことができました。また演劇界全体についても様々な危惧を抱いているような印象を受けました。俳優という仕事はほとんどその仕事だけで自立できないことも事実です。そのため演劇に関わる、関わらないは問わず他の仕事もしなければ生活が成り立たないそうです。そのため演劇は他の芸術活動と比べて資質が育ちにくいのではないかと問題があるのではないかとおっしゃっていたように思います。他にも演劇が女性中心に偏っている現状や観客の求めているものなど多くの危惧があるようでした。

10月6日

- ・公演当日準備補助
- ・制作補助

公演当日の午前中は受付場所の設営などを手伝わせていただきました。受付はお客さんが気持ちよく場内へ入ってもらうための場所なので、様々な心配りがなされているように感じました。私が準備中の時にも様々な人が行き来しており、あわただしく時間が過ぎていきました。開場すると、劇団・劇場の職員の方々がもぎり、場内アナウンスなど様々な役職を担当していましたが、その役職は常に固定されているわけではないようでした。私は常に決まっているものだと考えていたので、驚きました。

私はチラシをお客様に渡しましたが、お渡しするタイミングなど案外難しいと思いました。場内にお客さんが入っても様々なことを確認しなければならず、気が抜けない仕事だと感じました。観客に気持ち良く劇を見てもらい、無事に劇場を出てもらうまで仕事は終わらないんだなあ実感しました。

本番の時に私たちは劇を見せていただきました。ゲネプロと比べると若干変化したところがあったと思います。昨日、ゲネプロを行った時間もそれほど早いものではなかったので、遅い時間まで修正していたのだらうと伺えます。本当に直前まで続くのだと実感しました。公演終了後はお客様を送り出し、場内やトイレを点検し仕事は終わりました。

今回のインターンシップは劇場の仕事に直に触れることができ、本当にためになりました。直に触れることで初めて演劇にかかわる仕事の大変さ、やりがいを知ることができたと思いま

す。また、演劇にかかわる仕事の重みについても理解することができたように思います。
今回は貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

3 美術関係

3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ

文学研究科教授 藤岡 穰

報告者が開講している東洋美術史演習「仏教美術の理論と実践」(通年・集中)は、主に日本・東洋美術史を専攻する院生を対象に、美術作品のフィールド調査などを不定期に実施し、調査研究の実践力を身につけることを目的としている。また、美術研究のうえでは大学などの研究機関と両輪をなす、博物館施設におけるインターンシップへの参加も奨励しているが、その受け皿として利用させていただいているのが大阪市立美術館のインターンシップである。2012年度には1人の院生が応募し、採用された。

大阪市立美術館のインターン(研修生)制度は、2008年度に創設されたもので、近畿一円の大学院で美術史を専攻する学生若干名のインターンを受け入れ、学芸員育成のための研修を行っておられる。以下に、その募集要項を抜粋する。

1) 募集趣旨

大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン(研修生)を募集します。

2) 研修内容

常設展、特別展を中心に学芸業務全般に関して、当館学芸員と共に携わっていただきます。

3) 受入対象

大学院在学中もしくは修了者で、美術史や美術・文化に関連する分野を専攻する者、または同程度の能力・経験を有する者。

4) 受入人数

若干名

5) 研修場所 / 期間

大阪市立美術館ほか

平成24年(2012)5月中旬～平成25年(2013)3月31日 [10ヶ月程度]

6) 研修日 / 時間

原則として、1～2週に1日程度

9:30～17:00 [昼休み1時間程度]

7) 受入条件

- (1) インターンの報酬は無償とします。
- (2) 交通費/食費は支給しません。
- (3) 傷害保険に加入していただきます(費用は美術館で負担します)。
- (4) 当館とインターンの間で誓約書を交わしていただきます。

8) 応募方法等

エントリーシート

小論文 課題「大阪市立美術館インターンシップで学びたいこと」1200字程度

9) 選考

応募書類と面接により選考します。

10) 修了証

規定時間[150時間以上]、研修を修了した方に対し、修了証を交付します。

なお、2012年度の研修内容の詳細と担当学芸員は以下の予定であった。

A 中国書画 (担当 弓野隆之)

B 中・近世絵画 (担当 知念理)

C 近世絵画 (担当 秋田達也)

D 工芸 (担当 守屋雅史)

E 近世～近代美術工芸 (担当・土井久美子)

F 仏教彫刻・工芸 (担当 齋藤龍一)

文学研究科からは、このうちCに応募し、採用していただいた。予定されていた内容は、2012年度秋に開催された特別展「北斎」の準備を中心に、日本の近世絵画(主に18世紀以降)や近代日本画に関する平常展の準備などを担当学芸員とともに行うというもので、北斎とその作品に関する基本的な知識を有し、興味を持って諸作業に臨める人が望ましいとされていた。

大阪市立美術館のインターンは、一人の学芸員のもとでその補助業務を担当することを原則とし、特別展や常設展、普及事業など、各学芸員がその年度に担当する仕事に共に携わる。ほぼ1年間にわたり継続的に行われる研修は、それゆえ責任も大きく、大学院生にとってもかなりの負担になる。しかし、それぞれの学芸員の方のご配慮(大変なご負担)により、単に補助的な業務に終始するのではなく、美術史研究のうえでも有意義な、本当の意味での育成をしていただいております、とても貴重な経験の場となっている。この場を借りて、ご担当の学芸員の方々に感謝申し上げたい。

3.1 大阪市立美術館インターンシップの現状 ―導入から5年を経過して―

大阪市立美術館 学芸員 秋田 達也

大阪市立美術館では、2008年度よりインターンシップ制度を導入している。すでに5年を経過したこともあり、この制度が館内外においてそれなりに定着してきたように感じられる。現在の制度が最良という訳ではないが、5年の間に少しずつ改変が加えられ、大きな問題もなく続けられていることは、試行錯誤の中で始めたインターンシップ制度が、一定の形に整ってきたことを示している。本報告書の趣旨とは少し異なるかもしれないが、大阪市立美術館におけるインターンシップの5年間を振り返りながら、執筆者がこれまで担当した大阪大学の学生の方々について報告することにしたい。

大阪市立美術館の場合、基本的に学芸員1名にインターン1名がつくという形を採用している。できるだけ、インターンがそれぞれの専門分野に近い仕事に携われるようにという配慮である。さらに2010年度からは、募集要項に研修内容の詳細を記している。当初は、「中国絵画、仏画、近世絵画・・・」など募集分野を記しただけだったが、各担当学芸員が名前入りで研修の詳細を記すことにしている。詳細と言っても1人あたり数行程度のものだが、それぞれの学芸員がその年度に求めているインターン像を示すことでミスマッチを減らす目的である。実際、この方式にしてから、お互いの意識のずれは減ったように感じられる。

また、当初インターンは週1回程度(12ヶ月で300時間[約40日]以上)としていたが、2011年度からは月2回程度(10ヶ月で150時間[約20日]以上)に変更された。これは修了証を発行するための最低限の時間数ということであり、学芸員とインターン、双方の都合により適宜増やすことも可能である。ただ単に時間数を減らしたというよりは、制度の自由度を高めるための改善と言えるだろう。ちなみに、12ヶ月間から10ヶ月間への期間の変更は、翌年度の所属が決まってから応募できるように、応募の締切りを2月中旬から3月末に変更したためである。

このように周囲の意見を参考にしながら少しずつ変わってきた大阪市立美術館のインターンシップ制度だが、未だ残された課題も多い。いくら賃金を得ることが主目的ではないインターンシップとはいえ、交通費や昼食費ぐらいいは何とか補助できないものかと思う。これは、当初から何も改善されていない課題である。また、大学と連携を図り、大学の単位に認定してもらうことなども検討されていいように思う。この点においては、大学と美術館のインターンシップ制度に対する認識をすり合わせる必要があるが、同じような事例として博物館実習が1つの参考になるかもしれない。まだまだ改善の余地の多い制度・活動ではあるが、今後も続けていくことができるよう、美術館とインターンの双方にとってメリットがある、よりよいものを目指していければと思う。

さて、本来の報告の趣旨に戻るが、2012年度までに私が担当した大阪大学からのインターンは、2009年度の濱住真有さん、2010年度の露峰亜希さん、2012年度の曾田めぐみさんの3名である。いずれも日本・東洋美術史に所属する大学院生である。基本的には、各氏の研究テーマ

に近いところの常設展と特別展に関する仕事を手伝っていただいた。具体的な仕事の内容については各氏の報告をご覧いただきたいが、メインの仕事としては、濱住さんと露峰さんにはそれぞれに設定したテーマの常設展を担当していただき、曾田さんには特別展「北斎—風景・美人・奇想—」に関する仕事をさせていただいた。いずれの場合も、できるだけ本物の作品に接してもらえるように心掛けるとともに、掛軸などの取り扱いぐらいは慣れてもらえるように配慮した。また、作品の取り扱いや展示に関する技術的なことだけでなく、その際の心構えなどについても伝えたつもりである。少々率直過ぎたかもしれないが、理想的な学芸員像だけでなく、現実の学芸員の姿を肌で感じていただけたのではないかと思っている。私の例を叩き台として、将来それぞれが与えられた環境で、自分なりの理想の学芸員を目指してもらえれば幸いである。

最後に、各氏の常に誠実な働き振りは、美術館学芸員としての大切な資質が十分に備わっていることを感じさせるものであったことを書き添えて、この報告を終わりとしたい。

3.2 大阪市立美術館インターンシップで学んだこと

〔学生からの報告〕

大学院文学研究科 博士後期課程 曾田めぐみ

はじめに

大阪市立美術館インターンシップは、各受け入れ学芸員指導のもと特別展や常設展などの美術館業務の補助に携わらせていただく制度である。筆者は大学院で日本美術史を専攻している。普段の研究生活において作品に関する知識やその論文を所属研究室で得ることは可能だが、作品と間近に接する機会は決して多くはない。作品との触れあいを通して、美術史的知識だけでなく作品を展示し保護していく技術を学び、学芸員の業務内容や仕事の流れを体験することで将来の職業イメージを具体的に得たいと考え、本インターンシップに応募した。

秋田達也学芸員受け入れのインターン生は江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の画業を一望する特別展「北斎 ― 風景・美人・奇想 ―」（開催期間：2012年10月30日～12月9日、於大阪市立美術館）の補助業務に携わることができるとの募集内容であったことも強い応募動機となった。展覧会を作り上げていく上で必要な仕事の手順を経験することで、完成した展覧会からは窺うことのできない現場の業務に携わりたいと考えたからである。

ここでは、特別展および常設展の補助業務を通じて筆者が学んだことを報告する。

特別展「北斎 ― 風景・美人・奇想 ―」

まず、特別展「北斎」に出品される作品図版を既存の展覧会図録や画集からスキャンし、データ化する作業をおこなった。これは、出品作の調書作成および図録の作品解説執筆の際に必要な図版を揃えるための作業である。この業務を通じて学んだことは、複数現存する同一作品の浮世絵にもそれぞれ状態に差があり、制作時期が異なると摺りの良し悪しが表れるということだ。例えば、初摺りより後年に出版されたものの中には線の欠損を補う埋木の跡が見え、同一作といえども作品の質に差が出る。より良い摺りの浮世絵を展示するには、どのような作品が複数現存しているのかを把握しなければならないのだと勉強させていただいた。

特別展の展示作業には何度か参加させていただいたが、北斎展担当の秋田学芸員が異なる三つの業者に対してほぼ同時に指示を出されていた姿が強く印象に残っている。研究に専念するだけでなく、より多くの人に展覧会を見てもらうための工夫をしていく過程の中で必要となるコミュニケーション能力が、学芸員には必要であるのだと感じた。実際にケース内に展示していく過程の中で、当初の計画とは異なる作品順序となることもあった。展示計画はもちろん大変重要な要素であるが、そこに拘泥することなく実際の現場で作品配置を判断する柔軟さとしなやかな行動力が必要とされることを学んだ。

北斎展の図録製作では、入稿前に個々の作品解説の体裁を簡単に統一し、初稿から最終稿まで秋田学芸員とともに校正する業務を担った。一字一字確認しているつもりでも間違いを見落

としてしまう事もあり、原稿のチェックは出来るだけ多くの人の目によって行われなければならないものと感じた。また、第三者の文章を読むことで「読み易さとは何か」を考えさせられ、内容の事実確認を入念に行う重要性を再確認した。さらに図録の第二刷に向けた色校正をするため、実際に展覧会場を周りながら掲載図版と実作品の色の異同を細かくチェックされている秋田学芸員の姿が大変印象的で、図録が一度出来上がればそれで終了ではないということ、そこから学ばせていただいた。

図録に収録される作品解説の執筆も担当させていただいた。ここでは、鑑賞する際にポイントとなる要素を伝わりやすい言葉で端的に表現する難しさを痛感した。参考とすべき先行解説に誤りがないかを一つ一つ確認し、自身の解説にも事実誤認がないかを丁寧に見直す姿勢が何よりも重要であることを勉強させていただいた。筆者の拙い解説文は却って秋田学芸員のお手を煩わせる結果となったが、このような機会を一学生に与えていただきましたことに感謝申し上げます。

筆者が図録の解説を担当した作品は以下の通り。すべて北斎による作品。() 内には、所蔵者と図録(『北斎 — 風景・美人・奇想 —』大阪市立美術館、2012)における作品番号を示す。

- 「富嶽三十六景 深川万年橋下」(島根県立美術館、76)
- 「富嶽三十六景 東都浅草本願寺」(島根県立美術館、84)
- 「富嶽三十六景 江戸日本橋」(日本浮世絵博物館、95)
- 「富嶽三十六景 御厩川岸より両国橋夕陽見」(山口県立萩美術館・浦上記念館、100)
- 「富嶽三十六景 五百らかん寺さゞみどう」(中右コレクション、101)
- 「富嶽三十六景 本所立川」(島根県立美術館、105)
- 「富嶽三十六景 諸人登山」(神奈川県立歴史博物館、111)
- 「鎌倉の権五郎景政 鳥の海弥三郎保則」(太田記念美術館、265)
- 「楠多門丸正重 八尾の別当常久」(太田記念美術館、266)
- 「鬼児嶋弥太郎 西法院赤坊主」(名古屋テレビ放送、267)
- 「(群鶏)」(東京国立博物館、268)
- 「(雉と蛇)」(東京国立博物館、269)

北斎とその娘・応為を専門に研究されてきた秋田学芸員とともに、作品を目の前にして様々なご意見を拝聴できたことは、筆者の研究生活にとって大変刺激になった。展覧会は研究者にとって作品をまとめて実見することのできる貴重かつ重要な機会であり、最大限に自身の研究に活用すべきものであることを、秋田学芸員の研究姿勢から勉強させていただいた。

常設展「描かれた女性たち」

日本近代美術に描かれた女性をテーマとした平常展「描かれた女性たち」(2013年2月23日～3月17日)の業務では、作品選定からキャプション・解説の執筆、展示・撤収作業まで、学芸員の基本的となる業務に携わることができた。展示ケース内に作品が並べられていく過程を

目前にし、それまで何もなかった空間が生き生きとした空気を纏っていく様子から、展示空間を創っていく面白さを体感した。本展の展示作品を取り扱った際に気づいたことは、近代の軸装作品は展覧会出品のために制作されたためかそのサイズが江戸時代の軸装作品と比べて一回り大きいことである。筆者の体格では大きな掛け軸を取り扱う際に注意すべき点が多く、工夫を要することを学んだ。

また、本展のキャプションに添える作品解説を執筆させていただいた。執筆の際は実作品を間近にすることで自然に生まれてくる言葉を解説文に反映することができ、美術史の知識を踏まえながらも、目で見えて考えることの大切さを再認識した。解説執筆に際しては画家に関する情報を羅列するのではなく、鑑賞者が作品に興味を持てるような見所を説明するよう心がけた。

筆者が展覧会キャプションの解説を担当した作品は以下の通り。()内は所蔵者を示す。

島成園「無題」(大阪市立美術館)

鏑木清方「春雨」(個人蔵)

北野恒富「宵宮の雨」(大阪市立美術館)

鍋井克之「行水」(大阪市立美術館)

田川寛一「水泳選手 Mi 嬢」(大阪市立美術館)

桜井悦「朝」(大阪市立美術館)

おわりに

約一年間にわたり、作品の取り扱い方から研究姿勢にいたるまで、綿密な御指導を賜った。館蔵品を取り扱わせていただいた際には秋田学芸員より掛け軸の取り扱いのご指導を受け、風帯の露もクセがつかないように収納するなど、注意すべき点を丁寧に教えていただいた。インターン年度中は作品調査に赴く機会に恵まれることが多く、絵画調査の際はインターンでの学びをすぐに実践することができた。また、インターン中に秋田学芸員がおっしゃっていた「人に気を遣うのではなく、作品に気を遣うこと」という言葉を念頭に置くようになったことは、筆者にとって大きな糧となった。

本物に触れることの大切さ、そして作品を扱う際に必要となる慎重さを学ばせていただいた。楽しく学びの多い一年を過ごさせていただいた事に、秋田達也学芸員をはじめ大阪市立美術館のみなさまに深く御礼を申し上げる。

4 映画関係

4.0 2012年度インターンシップ概要

文学研究科教授 上倉 庸敬

平成24年度も、東映京都撮影所のご好意によって、美学・芸術学講義（該年度の講義題目「映画序説－映画研究の理論と方法－」）および美学・芸術学演習（該年度の講義題目「時代劇映画の日本」）で、インターンシップ参加者の募集をおこなった。ただし東映京都撮影所は「せっかくインターンシップに参加いただくならば、劇場公開用映画1篇あるいは連続テレビ劇映画1セット（1時間番組2週分）をご経験願いたい」というご要望で、そのためには2週間から4週間が必要であるため、希望者がいても実現することは数年に1度である。

今年度の希望者は熱心であり、撮影所と相談の上、報告書のとおり1月を越えるインターンシップに参加した。たずさわった映画作品は、撮影所が昨年もっとも力を入れ、今年暮れに周到な準備を重ねて公開される予定の大作であり、希望者の熱意は十分に報いられたろうと推量する。実際、映画に関する知識・洞察力の深化には、刮目すべきものがあった。また終了後にお目にかかった撮影所担当者からは、「すごい評判ですよ、現場の連中がみんな褒めてる、就職を希望するなら、わたし、推薦します」と、ありがたい感想をいただいた。残念ながらインターンシップが就職に直結することはないが、そのくらい撮影所でも歓迎されたということであろう。授業担当者として大いにうれしく、また鼻が高いことであった。

経過は概略つぎのとおりであった。

1. 年度初めに以下のような募集ちらしを配布した。

東映京都撮影所

インターンシップ募集

東映京都撮影所のご好意でインターンシップ希望者を募集します。

1. 内容 映画撮影現場業務（製作、撮影、録音など。広報などのデスクワークはありません。）
2. 期間 今年度（ただし2013年3月まで）のあいだの、ほぼ一月間。実際の日付は、撮影所と応募者が相談して、決定。
3. 応募資格 学生傷害保険に加入者で、以下のいずれかの者。
 - 1) 美学・芸術学の講義ないし演習の受講生。
 - 2) 撮影所の仕事に特に強い関心があつて、身体頑健な阪大学生。
 - ◆ 1) による合格者は、就業態度を上記授業の成績に反映します。
4. 応募方法
 - 1) 応募用紙は実践教育A棟、上倉研究室へ取りに来てください。

2) 提出先は、上倉研究室。締切は、実質、随時。

5. 審査方法

- 1) 第1次 学内書類審査と面接。
- 2) 第2次 東映京都撮影所書類審査と面接。
- 3) 合格者には個人あて連絡します。

問い合わせ先

文学研究科 芸術学講座 上倉庸敬

kamikura@let.osaka-u.ac.jp

090-8527-4070

2. 希望者に、自分の連絡先と出願の志望理由を提出してもらった。つねに連絡を取り合っている東映京都撮影所の製作課長と話し合い、連絡先・志望理由書を手渡して、今後の細部は、当人と直接、話し合ってもらったこととした。(東映京都撮影所と交わす、その他の「インターシップ実習生派遣に関する協定書(秘密保持、普通傷害保険・個人賠償責任保険・学生教育研究災害傷害保険などへの加入等についての協定)」「誓約書」「出願者データフォーム」「実習先提出票」「実習予定表および出勤簿」などの書類・書式は、多少の変化はあるものの、原則、例年のとおりと承知している。)

3. 終了後、参加者から報告を受けた。東映には礼を伝えて、前述の評価を受けた。

以上。

4.1 東映京都撮影所インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 4 回生 美学専修 山本 卓

私は、2012 年の 11 月、12 月のほぼ 2 カ月いっぱいを映画スタッフ育成事業のインターンシップに費やした。ほぼ毎日撮影所まで通った。文化庁からの支援により、撮影所の近くで家を借りていた。つまりは、週に何回来ればいい、というようなバイト感覚で参加することは不可能だ。作品がクランクインしたら、ほぼ毎日撮影は行われる。しかし、撮影が始まってから終わるまで、作品の画を撮りきるまでのすべての過程を目の当たりにできる。見学ではないのだし、はっきりいってめちゃくちゃ大変だった。しかし、経験してみても損はないことと思う。とんでもなく多くの人の情熱が注ぎ込まれていること、そして関係各所のような思惑が渦巻きながらビジネスとして成り立つのだということ。とにかく、いろんなことを思うことになるのだから。

11 月 1 日、インターンシップの開始。その前から、いろいろと雑多な手続きをメールや書面などでやりとりももちろんしていた。しかし、具体的に何をするのか、それはまったく知らされていなかった。知らされていたのは『利休にたずねよ』という作品名と、2 カ月というスケジュールだけだった。とにかく生活するのに必要なものを一式揃えて東映京都撮影所まで足を運んだ。私が配属されたのは製作課という部署。撮影所には、多くの部署がある。撮影、照明、録音、小道具、美術、衣装、演出。ざっとこのような感じ。名前を見れば、それぞれの部署がどんなことをしているのか、というのはだいたいわかるであろう。では、製作課とは何をしているのか。私自身、この時点ではよくわかっていなかった。至極簡単に言うと、予算を握っている部署だ。つまり、映画撮影におけるビジネスの部分を担当している部署だ、といえればわかりやすいと思う。予算を握っているとどういう動きをすることになるのか。まず、予算内で撮りきれないようにスケジュール管理をしなくてはいけない。また、予算に見合った演者のキャスティングを考え、交渉しなくてはいけないし、ロケ地への交渉にも行かなくてはいけない。スポンサーの方との交渉ももちろん必要になっていこう。必要な物資・備品を揃えるのも製作課だ。お弁当を買うのも製作である（お弁当のセンスがいかに重要か、をここで思い知る）。そんな風に、円滑に撮影が進むような動き全般をしていくのが製作課で、現場では進行、と呼ばれる。進行、つまりディレクション。ディレクターと言えば、聞き慣れた言葉になるだろうか。撮影、照明、演出、などの技術職の方々は、作品のクオリティをいかにして良くしていくか、ということを中心に考えている。それに対し、その要望をなるべく受け止めながら、現実的なビジネスとしていかに成り立たせるか、を考えるのが製作の仕事に他ならない。私自身、このインターンに参加している中でその役割を次第に理解していった。あるプロデューサーの方とお話しているときに、こんなことを言われたのが、とても印象的だった。

「仕事、というのは、事に仕える、と書く。そのことは、常に意識しなくてはいけない。仕事ってというのは、“調整”のことだと僕は思う。」

インターンを終えた今、まさにその通りだと、私も思う。

右も左もわからぬまま始まったインターン。クランクインまでは、備品の準備やら、ロケ地の視察（いわゆるロケハン）などに同行しながら、先輩方のお仕事を見たり手伝ったりした。先輩方は監督や各部とたくさん会議をしていたが、私はそれには参加できなかった。そんなときには、私は組部屋で脚本を読みこんでいた。撮影は基本「組」単位で行われる。組の名前には、基本的には監督の名前が冠される。私たちの場合は、監督は田中光敏さん、という方だったので、「田中組」だった。話の流れは、しっかりと頭に入れておかななくてははいけない。また、先輩方の脚本には、とにかく大切な情報が書き込まれていて、必死にそれを書き写していた。シーンごとに、これがどのセットで行われ、どういった機材や準備が必要で、エキストラが何人いて、なんていうことがびっしりと書き込まれている。脚本は撮影の見取り図のようなもので、皆さんもれなく脚本にはカバーを取り付け、大切に扱っている。なので、クランクイン前には、こんな風にやること自体は少なかったが、部屋に出入りする皆さんとコミュニケーションをとりながら、名前を覚えるのに必死だった。とにかく、映画というのは関係者が多い。各部署に数人の田中組のスタッフがいて、たくさんの演者もいる。それぞれの役割を覚えながら、顔と名前を一致させていくには骨が折れた。それに、クランクイン前に印象的だったのは、たくさんの差し入れだった。これから一緒にお仕事をしていく演者の方はもちろん、たくさんの企業から差し入れは届く。とにかくいろんな人間を巻き込みながら動いているんだ、という漠然とした印象を受けたことを覚えている。

そのうち、クランクイン。いよいよ撮影の始まり。撮影所の裏には神社が祀ってあり、まずはそこで関係者が集まり、撮影の成功を祈願した。主演の市川海老蔵さん、中谷美紀さんとはこのとき、初めてお目にかかった。著名人を目の当たりにし、緊張しまくったのを覚えている。初日は雨でロケの予定はずれこみ、セットからのスタート。こんなときのスケジュールの調整役ももちろん製作課だ。とくにマニュアルのようなものもないので、何をしていたのかまったくわからない。先輩の見よう見まねで動いた。進行の人間は、現場で唯一トランシーバーでやり取りする職種だ。「あれ用意して」「これ用意しといて」、「了解」「ラジャー」と耳につけたイヤホンから様々な指示が入ってくる。これには少しテンションが上がる。サバイバルゲームをしているみたいで面白い。ただ、私は備品の場所がわかっていないので、最初のうちは一番年下の先輩がその指示に従って動いていた。現場で初めてした仕事は、下足をキチンと並べることだった。それくらいならできた。セットでは、いろんな人がセットに上がったり、地面に降りたり、という動きをしまくる。なので、下足をキチンと整えておくと、人の動きがスムーズになる。自分の仕事も役割もまだはっきりと理解できていなかったもので、先輩に倣い下足並べ

に没頭していたのを覚えている。そのうちにどれが誰の下足かがわかってくるので、その人が動いたときに、先回りして準備したりもした。ちょうど信長と秀吉の登場シーンだったからかもしれないが、秀吉が信長の下足を懐で温めていた、という話を思い出す。何が必要になるのか、何をしたら役立てるだろう。考えに考えまくれば、必ず何かすべきことは見つかる。結果、下足を温めることくらいしかなかったとしても。ちょっとしたことかもしれない。でも、何かすべきこと、というのは必ず見つかる、と秀吉は考えていたのだろうか、なんてことを考えたりもした。

しかし、何度怒られたことだろうか。いろんな人に、いろいろ怒られた。現場では、とにかく人・モノの動きが多い。カメラ位置を動かすたび、ピントを合わせ直すし、位置も調整する。セットの壁も取り外したり、嵌めこんだり。照明もまたセッティングし直す。毎回のショットがお引越しのようなものだ。素人が撮影現場に来て最も驚くことの一つは、照明へのこだわりだと思う。影を作ること、絶妙な陰影を作り出すこと、光の量を調整して、モノが一番きれいに見える光量を見極めること、それらを、たくさんの照明機材を駆使して行う。撮影が始まるころには、被写体の周りには無数の照明の“林”が聳えたっている。こんな具合なので、少しでもちんたらしていると、動きの邪魔になってしまう。そこ邪魔！と何度怒鳴られたことだろうか。しかし、そのうちに動きを覚えていった。ショットの方向を見極めながら、どこへどのようにモノを動かしていったらいいか、がなんとなくわかってくる。ただ、そうになると、そこは触んな！なんて声が聞こえてきたりする。こんな具合に、怒られながらセットでの振る舞い方を覚えていった。

物的なモノの動きをだんだんと覚えていきながら、今度は心の動きも調整しなくてはいけない。スタッフや演者の方に気持ちよく仕事をしてもらうための環境を整えるのも進行の仕事だった。秋から冬にかけての撮影だったため、セット内の室温調節は重要な仕事だ。演者さんは衣装が決まっているので、室温調節は体調に直接関わってくる問題だった。演者さんにカイロを供給するのは、私が仰せつかった大事な仕事の一つだった。冬口の撮影では、空調では間に合わなくなってくるので、炭を焚いて撮影に臨んだ。演者さんのもとに炭を持って行ってあげるのも、私のような下っ端が行う仕事だった。腰掛けやコーヒーなども持って行ってあげて、よりよい状態で仕事をしてもらうのも私が主にやっていた。なので、演者さんに直接感謝されたいし、顔も覚えてくれた。それはとてもモチベーションにつながった。演者さんだけでなく、スタッフの方にもそのことがきっかけで感謝されて顔を覚えてもらうようになっていった部分大きい。進行の先輩がこんなことを言っていた。

「コーヒー一杯用意してあげるだけで、現場の雰囲気は全然違う。ちょっと一息入れる間があるだけで、現場にコミュニケーションが生まれて、いい作品になっていく」

現場の雰囲気は、作品の質に直結する。作品作りは、一つのチームプレイだ。実際、ピリピリするときもあるし、和やかなムードになるときもある。和やかなムードでできたときには、驚くほどすいすいと撮影が進んで、いい演技が引き出され、いい技術も引き出される（もちろんプロの集団なので、雰囲気なんかには負けないくらいの経験と技術が蓄えられている、という前提のうえで）。映画作りも中心に“人”がある。沈むときもあれば、垢抜けるときもある。真面目なときもあれば、砕けるときもある。そのテンションを掴むことが、映画作りには必要なのだ、ということを、コーヒーを作りながら考えていた。

現場には、様々なゲストが来る。そのようなゲストの方にも、私たち進行の人間は気を使わなければならない。椅子やスリッパを用意したり、コーヒーを用意したり。最恵国待遇を意識する。原作者の山本兼一先生、テレビ局の人間、本社の人間、スポンサーの人間。様々な人が現場の様子を視察しに来た。ゲストが来るというのは、そこになんかしらのビジネスが発生しているということに他ならない。なので、最恵国待遇なのだ。その証拠に、必ず現場には彼らからの差し入れが私たち製作のもとに差し入れられる。そして、製作の人間がそのことを現場に報告する。ゲストがその場にいる間に必ず。「〇〇様より差し入れをいただきましたー！！ありがとうございますー！！」と先輩が現場に声を轟かせる。そして、その菓子折りを拵げ、その脇に大きな字で「〇〇様より差し入れをいただきました」と一筆したためる。日本人らしい、手土産を介したコミュニケーション。送り手は、「撮影頑張ってください。応援しているので」というメッセージを。受け手は、「あなた様のご支援に預らせていただき、たいへん感謝しております」というメッセージを。手土産という暗喩に込めて。こんな風に経済は回っているのだな、と改めて実感する。

進行が最も活躍するのはロケだ、と先輩方は言っていた。たしかにその通りだった。やるべきことがたくさんあった。しかし、はじめに言っておきたい。とんでもなく疲れる。ロケの後には死にそうになった。ただ、やりがいを感じられる。まず、ロケハンだ。どこでロケをするか、すべての調整事を進行で行う。土地所有者との交渉や、近隣住民へのビラ配り、車輛の手配などの準備をだいぶ前から整える。とくに京都はありがたい建築物に満ちているので、ロケをさせてもらう場合には細心の注意を払う必要がある。そのため、ドタキャンなどもしばしばあって、てんやわんやになる場面もあった。ロケハンのために、進行の休日は大概つぶれる。撮休日の次の日は大抵ロケなので、前日にはいろいろと確認や準備を行わなければいけない。車輛をどこにどのように配備するか（ロケの日とはとにかくトラックの数が半端じゃないので、これらの整備は死活問題なのだ）、控室の場所、撮影場所、機材の集積場所、エキストラに関するあれこれ、トイレの場所から喫煙場所まで。そして、お弁当。勝手がわかっているセットでの撮影では、時間管理さえしっかりとしていればよい。撮影所で迷う人間はいない。しかし、勝手のわからないロケ地では、動きから何から何まで進行が把握し、すべてを仕切る。それに、ロケでは一般人が集まってきてしまう。彼らを捌くのも我々の仕事だった。大変だった。「あの

おっさん止めろ！」「そこ（フレームに）入ってる、引っ込めろ！」「車来た！一旦撮影止めろ！」トランシーバーには常に怒号が鳴り渡っていた。観光地のど真ん中でも撮影をした。南禅寺や長谷寺、神護寺など、紅葉の盛りにロケを敢行している。圧巻の背景は、ぜひとも見ていただきたいと思う。そのかわり、進行と観光客との熱いバトルがその裏で繰り広げられていることをぜひとも頭の隅に置いておいていただきたい。それから、音止めも大事な仕事だった。撮影中に騒音が入らないように、ロケ地周辺の工事現場などに行き、音を止めてもらうこと。それがまた大変なのだった。大抵、邪険に扱われた。毎回のように迷惑そうな顔をされた。工事現場のおっさんは、当たりがキツイ。お願いします、と言って何度も頭を下げた。もちろん、カメラが回っている数十秒とかの間だけだ（それが何度も繰り返されるのだけ）。ずっと工事作業を止めてしまうわけにもいかないので、工事現場近くにずっと張り付いて、トランシーバーで音止めの瞬間を知らせてもらう、という形をお願いしていた。なので、工事現場のおっさんには、邪険にされながらもだんだん顔を覚えてもらうようになった。映画撮影なんて物珍しいイベントに、なんだかんだいって人は興味があるようだった。タバコ休憩がてらに、いろいろと話しかけてくれた。「大変そうだね、兄ちゃんも」とか言って、絡まれることが多かった。当たりがキツイのも、工事現場のノリのようなものだ、と優しめのおっさんが教えてくれた。実際、おっさんにビビる僕を見るのを、彼らはものすごく楽しんでいたそうだ。彼らなりの、珍客のもてなしでもあったのだな、と思う。それに、若いのはいいことだな、なんて思ったりした。こんな風にいろいろと可愛がってくれるのも、若いうちだけだろう。まだ、不器用で、至らなくて、わかっていなくて、だからこそ、かまってくれるんだろうな。最初の2、3年だ。たくさん間違えればいいし、たくさん頼ればいい。でも、そればかりではいられなく、頼られる存在になることも、3年ほど過ぎたら意識しなければいけないだろう。

そんな風にして、2カ月間は過ぎていった。演者さんのクランクアップの瞬間が、次第に増えていく。そのたびに、演者さんを称え、花束を贈り、労った。「おつかれさまでした」。いい日本語だよな、と改めて思う。そんな瞬間がとても好きだった。どんな形にせよ、何かをやりきる、ということの美しさ。海老蔵さんのクランクアップには、監督やスタッフの方々と抱き合い、互いに労をねぎらい合っていた。全員で記念撮影をした。今でもその写真が手元にある。何かを一緒に作り上げる、というのは、やはり何にも代えがたい喜びがある。

仕事とは何か、と改めて考える。仕事とは“調整”である、とあるプロデューサーは言った。たしかにその通りだな、と感じた。「うまいこといくようにする」、という感覚だと思う。僕は主に内部の人間に対して、うまいこといくようにするように仕事をしてきたけれど、先輩方には、外部との調整も多くある。互いの利害や、質や、量や、いろんなことを考えながら、最大公約数を見極めていく。なんだかんだいって、頭を使うもの。でも、手も足も動かしながら、話したりしながらすり合わせるのだから、一筋縄ではいかへんもの。大学出たから偉い、なんてこともない。頭を使って、何をしたらか、ということが大事なのだと思う。頭がよくて、めちゃく

ちや勉強ができます、というだけでは、実際に調整的なことはできない。仕事は一人ではできなくて、そこでは頭がいいという以上に、人間力というものも同時に必要になるからだ。逆に、こんなことしました、やり遂げました、だけでもだめだ。損得感覚をもち利害調整ができなければ、ビジネスにおいては死活問題になりかねない。そして、やりっぱなしで満足するのではなく、そこから何を感じたか、何を学んだか、をしっかり自分のなかに落とし込むことである。それこそが仕事の質を極めるうえで重要なことであり、人間的な成長につながる。

以上、インターンシップで感じた悲喜こもごもをざっと書きならべてみた。正直に言えば、本当に大変だった。靴をひとつ、履きつぶした。でもだからこそ、自信につながった。こんなに大変だったのに、なんとかやれた。一度、飛び込んでみるといい。泳げるか泳げないか、は全然関係ない。死にたくないから、なんとか必死にもがくのだし。必死にもがいている姿を見れば、どんなに下手くそな泳ぎだって、きっと励ましてくれるし、応援してくれるのだから。逆に、必死にならなければ誰も助けてはくれないだろう。僕も、決して器用な泳ぎではなかったと思う。でも、いろんな人に助けてもらいながら、なんとかこのインターンシップを終えることができた。泳ぎ終わったいま、何をしようか。陸にいては、もったいない。またどこかへ飛びこんで、必死になって、もがいてやろう。そのときには前よりちょっとだけ、うまく泳げていたらいいな、と思う。

